

地理情報を比較利用した近世絵画での写実性について -葛飾北斎「富嶽三十六景」をめぐる考察-

On reality in pre-modern painting using Geo-Information - About Katsushika Hokusai [Thirty-six Views of Mt Fuji] -

関口敦仁

SEKIGUCHI Atsuhito

Abstract 近世絵画において、制作上での写実性の位置付けについて、葛飾北斎「富嶽三十六景」を中心に検証を行う。

モチーフとしての富士山を地理情報とすれば、現在も描かれた時代とほぼ同形を保っている。この点に着目し、地理情報データを利用して特に山頂部位の形態比較を行い、絵画様式と写実性の関係について、様式と時代の価値観に含まれる課題を発見する。

Keyword 近世絵画、写実性、富士山絵画、写生主義、葛飾北斎、数値標高データ、地理情報、富嶽三十六景

1. はじめに

平成8年、当時まだDVDの標準規格が決定していない時期に試験的なコンテンツとして「富嶽三十六景 with DVD」の制作をおこなっていた。そのために数人の学生達が、富嶽のシリーズの中で葛飾北斎が富士山を描いたであろうと言われている土地へそれぞれ行って北斎の「富嶽三十六景」の構図と同じ位置思われる位置から実写映像を撮影した。その中でも日本橋や江ノ島などのように、現在でもその位置や地形が判定可能な場所については、描かれた場所の特定は可能である。近年ではこの富嶽三十六景や広重の東海道五十三次図などの、過去と現在の場所を重ねて、描かれた場所や地形を紹介する研究や冊子も多く紹介されて、一般にもなじみの深いテーマとなっている。しかしながら、そのなかでも場所の特定が難しい作品や実写の真偽が問われるような作品ではそれらの絵に対する通説の検討や原画との比較は既になされて、新しい見解による検討は行われていない。当時は入手可能な国土地理院の50m標高メッシュ数値地図データによって制作した三次元CGモデルを使用したシミュレーションによる考察を行った。その一つとして神奈川県二宮町から描かれていると言われている「相州梅沢左」の画中において、その数値データから三次元地理モデルを作成し描かれた場所の特定時に特徴的に描かれている山を参照して調査した。定説として金時山といわれている山の形状をもとに、描かれた場所を特定しようとしていた。しかしながら、どうも金時山といわれているものと形状が異なる。その山は山頂部の形が丸みを持ち、その形状からは二子山のどちらかのようでもあったが、位置関係からするとかなり寄せて移動しないと

なり無理があった。梅沢は富士山からほぼ真東の方向上にあり、その方角で形も近く該当しそうな山を探し出した。地図から名称を特定するとそれは矢倉岳で、金時山ではないと、画面内の形と位置の比較から判断した。描かれた場所として現在の神奈川県梅沢周辺と考えら

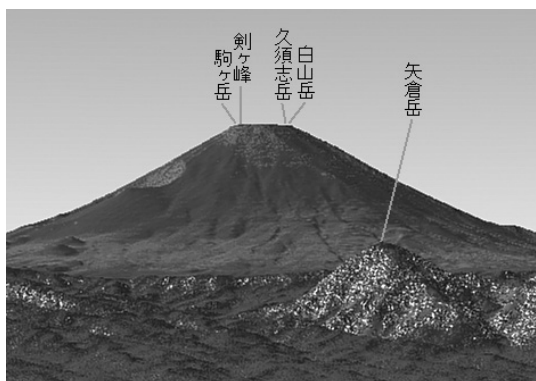


図 1 50m メッシュによる梅沢左の風景

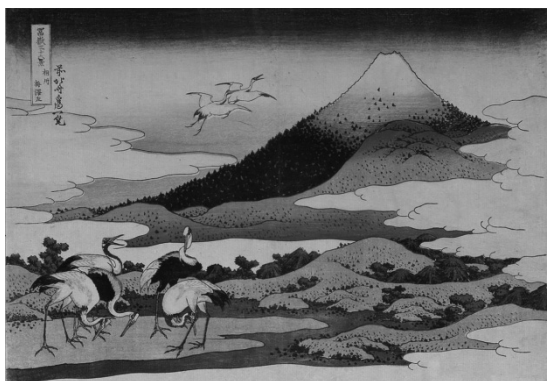


図 2 葛飾北斎 富嶽三十六景__相州梅沢左
東京都国立博物館所蔵

れているが、梅沢の西、富士山方向への直線上に標高 200m ほどの丘があり、梅沢エリアからは富士山山頂部は見ることはできてもその丘に遮られ、矢倉岳も共に見ることはできない。より西へ移動し、当時は国布津から見たモデルを生成した。梅沢北の吾妻神社裏山か西側の丘からはかろうじて矢倉岳を含む同様の風景を得ることができる。北斎が風景の位置関係から写生を元に制作をしていたのであれば、形状から判断しても描かれているのは矢倉岳だと思われる。

国土地理院では主要な山の山頂部を 10m メッシュ標高データとして、一般にも手に入るようになり、2009 年には各種数値データのインターネット公開実験を始め、10m メッシュ標高データによる地理情報の利用がより扱いやすいものとなった。50m 標高メッシュデータでの精度ではこれまで山の外形程度の比較のみが可能で、10m 標高メッシュデータとなって初め

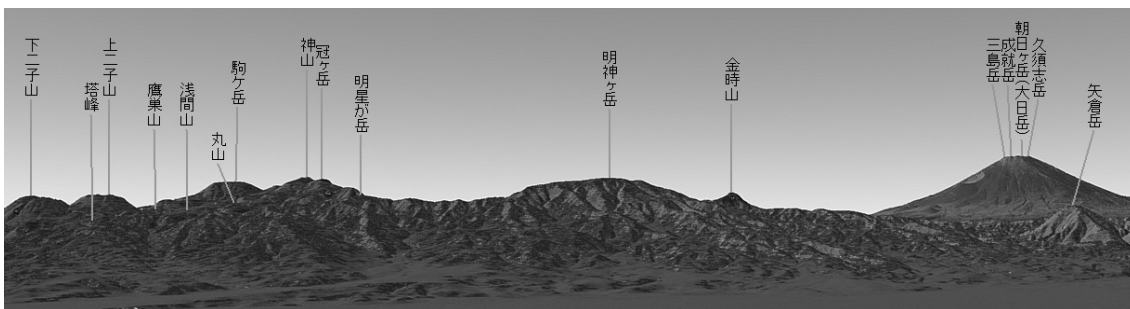


図 3 梅沢の西位置より西方を見た風景(10m メッシュ標高データ使用)

て、尾根や谷などの山の表情についても比較が可能となった。富士山を中心とした標高データを元に地形を描き出し、北斎の富嶽三十六景の作品の一部を取り上げ、描かれている富士山の形状に付いて、どのような性質の写実性を持っているのか、また、描かれた場所の特定のために新しい視点構築の可能性などについて考察する。

2. 近世絵画の富士山山頂の描写

2.1 北斎の評判

図4は明和4年（1768年）に刊行された河村珉雪の版本「百富士」の「酒匂川」で梅沢左と同方向を描いている風景である。北斎の「富嶽三十六景」の刊行が文政6年（1823年）であり、55年も前に刊行されている。「百富士」は北斎がその画題や構図において多く影響を受けたと言われ、ほぼ同じ構図による図版が多く存在する。「深川万年橋」「青山円座の松」「相州戸塚」など構図をまねているとの指摘をされている。図4「百富士／酒匂川」は小田原の東を流れる酒匂川の東から、おそらく国府津かその東の丘からの風景と思われる。図3の地形復元図と比較すると「百富士／酒匂川」の風景は南北に圧縮され、左頁は二子山の二

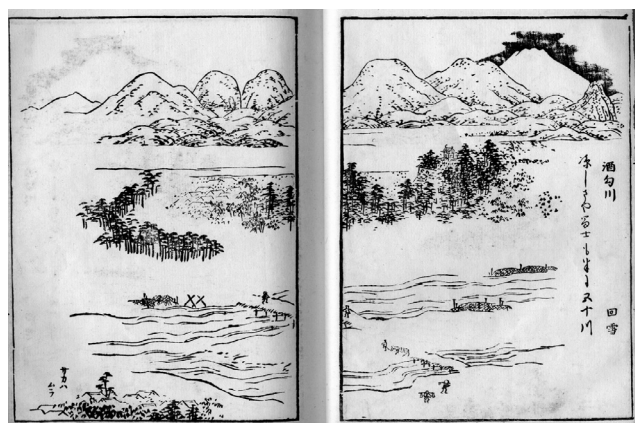


図4 河村珉雪 百富士 酒匂川個人蔵

峰が右頁には左から駒ヶ岳、冠が岳、富士山、矢倉岳の順で描かれており、明神ガ岳や金時山が省略されているのが判断できよう。このような構成方法は一般的な手法であったと思われる。同様に北斎も晩年に自らを画狂人と称して様々なモチーフを綿密に描いている一方で、画面構成上からいくつかの題材を一つの画面に合わせて、構成をおこなったと作品も多く見受けられる。広重などの同時代の絵師と比較すると、風景画において構図上の操作が多い点が挙げられる。江戸期には多く見られる粉本主義による考え方などからも過去の作品の引用や絵の構成の都合から操作を行うことについて、おおらかな考え方も持っていた。また、構図の決定に際し、漢画の故事を描く手法として、物語の構成を時間軸にそって同一画面上に展開するなどの構図の決定手法を用いながらも、部分的な写実性を保ち且つ構図上の自由度は高い。また、部分描写での写実性が高くても、南蘋派や漢画で見られるような、形を誇張する画法によってモチーフの特徴表現を好んで描いている。北斎の自由な引用手法は、時に他の絵師の反感も買っていたようである。多くの研究者が指摘するように「武江年表」での記述などからもそのような状況が伺える。

鯉方蕙斎は浮世絵師として漫画本を最初に書いた人物である。北斎は同様に漫画を書き、また同様に彼が狩野一門として江戸市中や日本全域を鳥瞰図風に描くと、北斎もまた同じような構図法で描くというように、人のまねをする絵描きとしての評判も持っていた。江戸の行事を詳細に記述した斉藤月琴の「武江年表」に喜多村筠庭が増補を書き入れた「増補武江年表」寛永年間記事には浮世絵の記述に

「筠庭云、・・・△北斎は画風癖あれども、其徒のつはものなり、政美（北尾政美-浮世絵画家時代の名）は薙髪して、狩野の姓を受けて紹眞と名乗る、これは彼等が窩堀を出て一風

をなす、上手とすべし。語りて云ふ、北斎はとかく人の真似をなす、何でも己が始めたことなしといへり。是は「略画式」を蕙斎（歟方恵斎-お抱絵師としての名）が著はして後、「北斎漫画」をかき、又紹真が「江戸一覧図」を工夫せしかば、「東海道一覧の図」を錦絵にしたりなどいへるなり、」

との記述がある。

すでに河村眠雪で例を挙げたように、富嶽三十六景制作において現地での写生の有無や他人の絵から構図を引用したという説も考慮して、写生の事実の信憑性と、これらの絵の写実性がどのような性質のものであるか判断をしていきたい。

2.2 富士山火口部の表現と変遷

富士山は江戸時代中期の1707年（宝永4年）宝永の噴火によって東南の山腹形状を変え、宝永山を形成するに至ったが、頂上火口部の形状を変えるような噴火があった訳ではない。最古の富士の形は鎌倉時代から描かれている通り、そのすがたをほとんど変えていない。富士山が長い時間において形を変化させず、且つ様々な時代に描かれたことを鑑みれば、どのくらい富士が写実的に描かれたのかは、現代の富士山の形からも用意に比較可能なのではないかと考える。

富士の火口部は八つの峰があり、仏が座す蓮の八葉に例えられて、個別の名称と地理名称をもつ。それぞれの岳の高さや形状が異なりこれが富士山の見栄えを見た場所から異なる形状として与えている。その名称と現代火口部位の名称が異なっており、峰名が混乱する原因も作っているが、最高部が剣ヶ峰で次に高い白山岳（釈迦ガ岳）、割石（釈迦割石）がとく

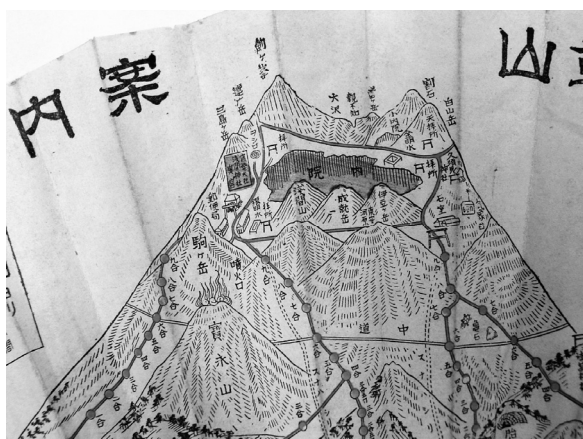


図5 富士登山案内図部分 時代不明 岐阜県分布地図センター



図6 富士登山案内図扇子 時代不明

に江戸方面から見た場合にそれぞれに角のように尖っていると表現される。順に対応名称を記していくと剣ヶ峰 3776m、白山岳（釈迦ヶ岳）3756m、伊豆ヶ岳（阿弥陀ヶ岳）3740m、朝日岳（大日ヶ岳）3730m、勢至ヶ岳（成就ヶ岳）3730m、三島ヶ岳（文珠ヶ岳）3730m、久須志ヶ岳（薬師ヶ岳）3720m、駒ヶ岳（浅間ヶ岳）3710m、がある。富士山の案内地図や扇子、立体地図などいつから販売されていたか定かではないが、各登山口からの風景を本に山頂部までの全体的な地図が多く出回っていたものと思われる。特に江戸末期以降は様々な登山地図が出され、そちらの資料からも当時の富士山頂上の形に対する考え方も伺い知れる。（図6）角型の山頂

の形状は北斎においては特にその表現は顕著で江戸末期以降は江戸から見た富士山として、そのイメージが定着していたと考えられるであろう。

日本絵画史における富士山絵画の研究では成瀬不二夫氏が様々な視点から論及し、鎌倉時代から近代まで形状の比較や描写法など多様な視点から研究がなされている。その中でも富士山絵画史で構図上の定型を作り出している起源として、頂上から浅間神社本宮を結ぶ西南方向のライン上の地域（図16）からみた富士山を中心とした風景がある。



図7 聖徳太子絵伝 部分のスケッチ画

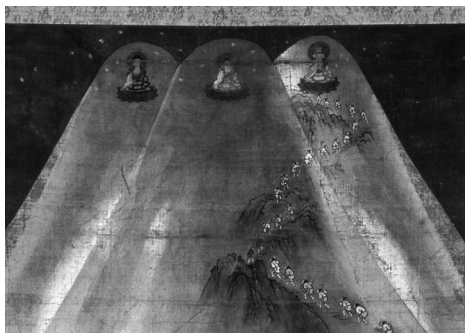


図8 富士参詣曼荼羅図部分

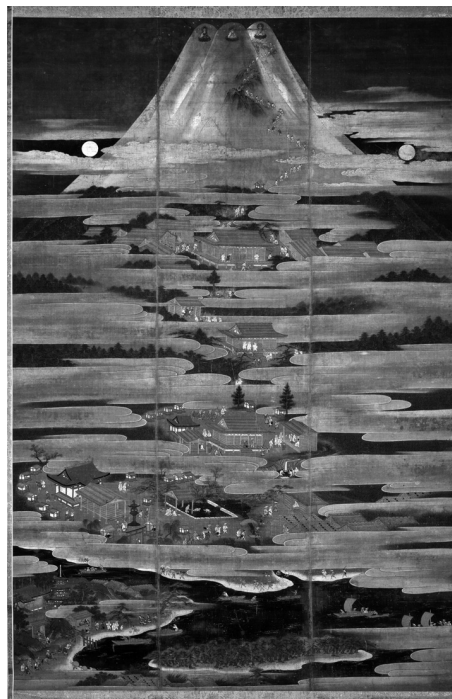


図9 伝狩野元信 富士参詣曼荼羅図
富士山本宮浅間大社蔵 室町時代

とくに、鎌倉時代の聖徳太子絵伝における、富士山の形状からみられる定型のパターン分析では粉本とされ定型にいたる関係性などに付いても言及されている。室町時代、狩野派創始の狩野元信が描いたと伝えられる富士参詣曼荼羅図では山頂の形状を三位一体の象徴として、きれいな三峰型として描かれ、以後狩野派の定型の基本となる象徴的な作品である。

この狩野派による富士山頂の定型描写は本画において、変わることなく続いた。（注、江戸



図10 富士宮浅間神社本宮前から画角2°

狩野の創始者狩野探幽は写生画に置いては、近代的な正確な描写による富士山のスケッチを数多く残している。山下善也氏や安村敏也氏は狩野探幽の再評価に付いて言及している。また、これらのスケッチの存在は当時広く知られ、これらの他の作家への影響に付いては注意

深く調べる必要があるであろう。この狩野派の定型となった山頂部形状に付いては、元信の描いた富士山本宮浅間神社からの形状が基本となっている。

図 10 は浅間神社本堂前の位置より山頂部を杉村氏制作の山岳案内用フリーソフト「カシミール」を利用して、国土地理院より提供されている FG-GML フォーマットの 10m 標高メッシュデータを表示したものである。(他に図 3, 19, 20, 23-25, 26, 32-41 は同手法) 中心位置は剣が峰で右側は駒ヶ岳、左側は大沢崩れをはさみ馬の背、雷岩である。この位置は火口部中心より南西の方角となる。この方角より描かれた代表的な絵画として、永青文庫所蔵伝雪舟富士三保清見寺図(図 11, 12)、狩野探幽富士山図(図 13, 14)、に影響をうけた多くの画家や司馬江漢(図 15, 16)、などがあげられる。

図 11 からの形状を考えれば、雪舟の富士の描き方は比較的本来の形の特徴を捉えており、とくに中央の剣が峰の突出した形状と左側斜面をやや強調した点などに大沢崩れの特徴も見受けられ、現状の描写を反映している。

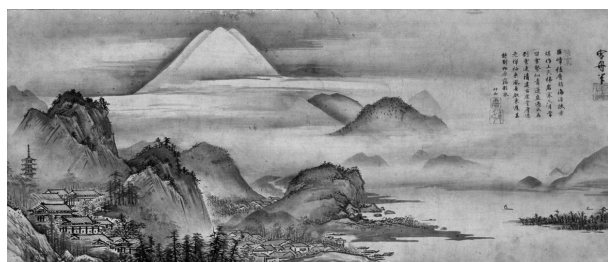


図 11 伝雪舟 富士三保清見寺図 室町時代紙本墨画 永青文庫蔵

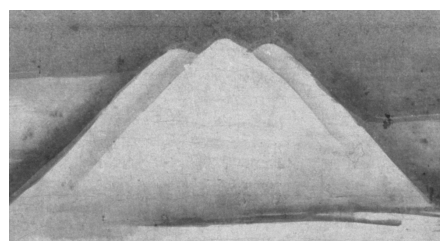


図 12 伝雪舟 富士三保清見寺図の部分 永青文庫蔵



図 13 狩野探幽 富士山図 1667 年(寛文 7 年) 静岡県立美術館蔵

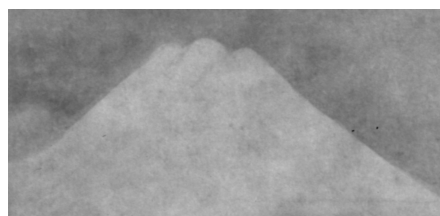


図 14 狩野探幽 富士山図の部分 静岡県立美術館蔵

図 11 の伝雪舟図は三保の松原を取り入れた構図の妙によって、広く一般に知られている。江戸狩野派の創始者狩野探幽はこの伝雪舟図に触発されたと思われる。探幽を始め狩野派系列の画家たちの多くが同様の構図で描いている。雪舟とほぼ同じ方角から描いている富士清見寺図の構図から判断できる範囲として見た場合、現実の山頂位置は中心よりやや左へとずれている。形状的に雪舟画は山頂部左側の大沢崩れの特徴を感じさせているが、探幽画は元信の形状をそのままに利用し、定型化しているのだろうか。このように構図状の問題において、探幽は雪舟の絵を参考としているがより定型化した三峰型の富士山山頂を描くことでより狩野派の美学を形成しようとしていることは明らかである。山頂をこの位置から見た場合早朝の光によって比較的丸い形を示し、それをうまく利用したと考えることもできるであろう。しかし山頂部以外の風景はより漢画の影響から離れて、より写生画に見られる写実性を

積極的に取り入れている。探幽は写生帳によって、より写実的な富士山を描写した作品群の存在が知られている。このような表現は探幽からはじまる江戸狩野に特徴的なより手法として手本とされていった。

一方、鉄舟寺観音堂より描かれたとされる司馬江漢の作品は積極的に富士を含む風景を忠実に描こうとしており写実性を高めている。司馬江漢は「…探幽富士の画多し、少しも富士に似ず、只筆意筆勢を以てするのみ、…」と述べているが、探幽の富士図よりも絵全体が与えるプロポーションは皮肉にもそのリアリズムによって現実の情緒性が失われていると感



図 15 司馬江漢 駿河湾富士遠望図 1799 年(寛永 11 年)静岡県立美術館所蔵

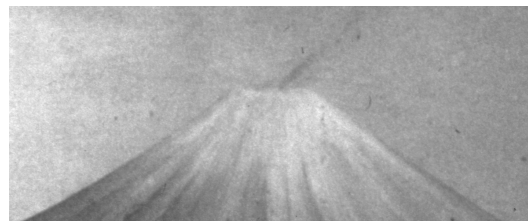


図 16 司馬江漢 駿河湾富士遠望図の部分 静岡県立美術館所蔵

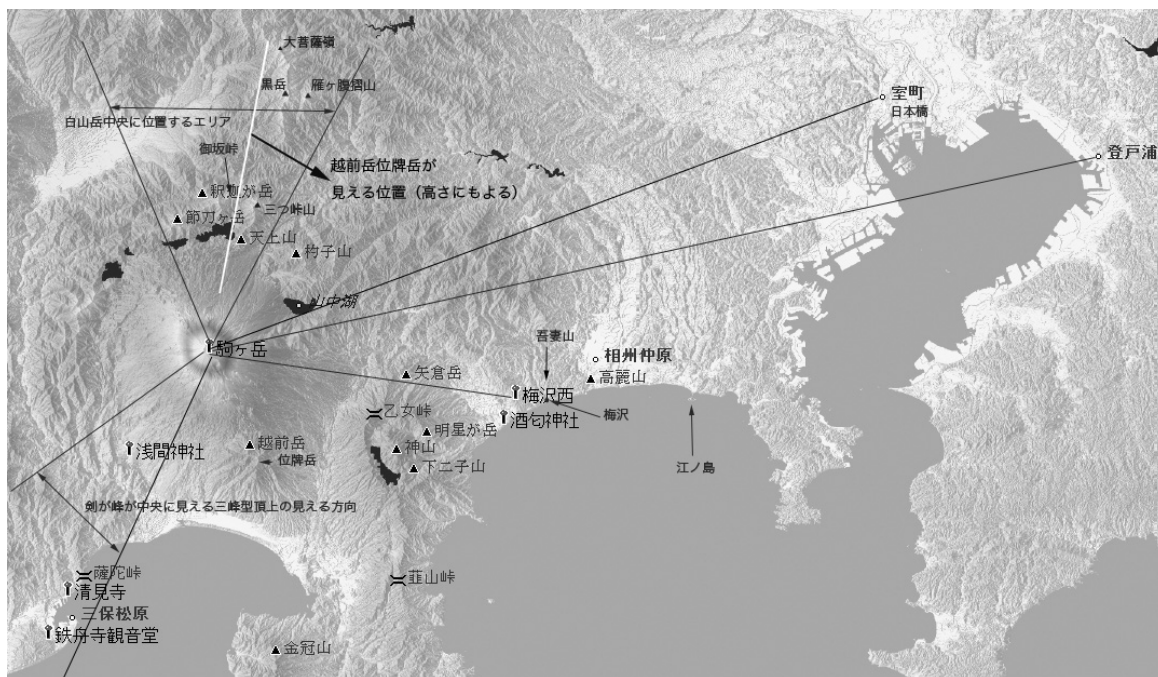


図 17 富士山周辺鳥瞰図 北部では杓子山、三ツ峠山、雁が腹摺山、大菩薩嶺の位置関係に注意

じるかも知れない。この点は司馬江漢が様式としての絵画性への着目から、現実主義としての写実性を洋画に求めていた部分でもあり、表現上の現実性を価値として捉えたと考えるべきであろう。北斎はこの方角からは江尻宿を描いたとする駿州江尻が富嶽三十六景の中にある。しかし山頂の形は田子ノ浦方面から見た形に似ている。北斎が写生を元に描いたとすれば、背後の山影のように見えるのは宝永山であろうか。同時期に同様な描き方をしているが、このままでは江尻宿から描いているとは思えない。この絵以外にはこの方角から描かれたとされる絵は百富士のシリーズ中にも該当が無い。北斎にとってはこの方角から定番の富士を描く意味を見出さなかったのだろうか。

3. 北斎富嶽三十六景での富士山火口部の表現

3.1 江戸方面からの火口部の表現

江戸方面日本橋から富士の山頂部は現実の直線距離にして約 100km の距離があり、また北斎は洋画の遠近法により遠景を小さくする手法を浮世絵の中で積極的に取り入れている。こ

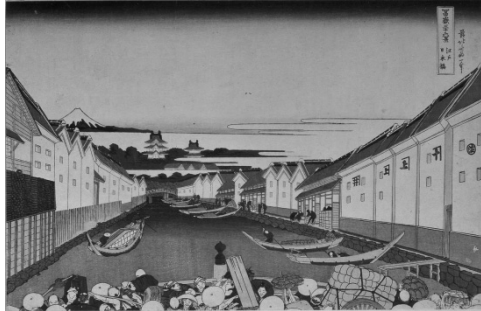


図 18 葛飾北斎 富嶽三十六景__江戸日本橋 東京国立博物館所蔵

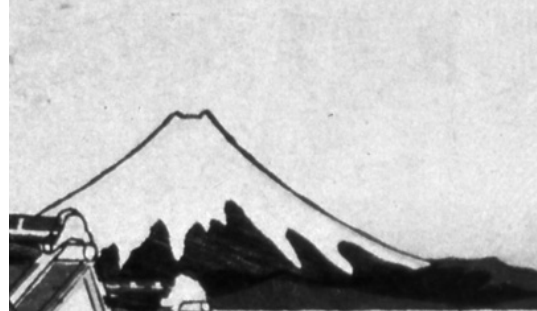


図 19 葛飾北斎 富嶽三十六景__江戸日本橋の富士山部分 東京国立博物館所蔵

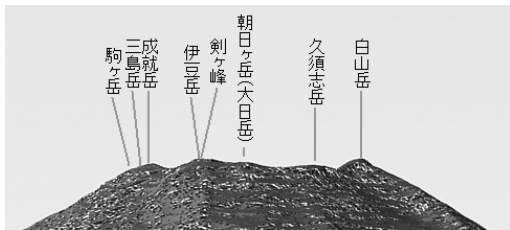


図 20 日本橋から画角 1°



図 21 日本橋から 画角 4°



図 22 葛飾北斎 富嶽三十六景__登戸浦 東京国立博物館所蔵

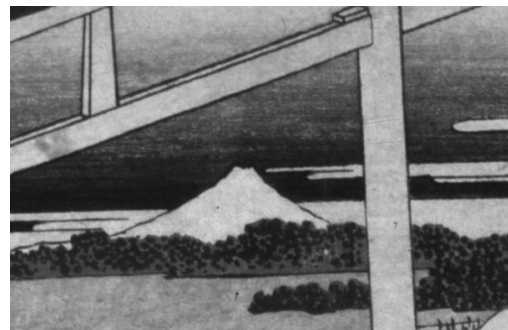


図 23 葛飾北斎 富嶽三十六景__登戸浦の富士山部分 東京国立博物館所蔵

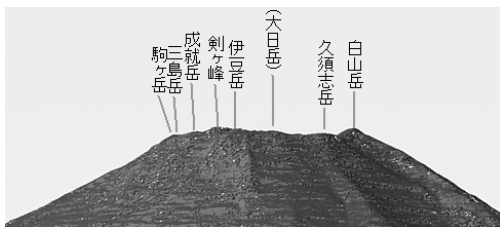


図 24 登戸神社から 画角 1°

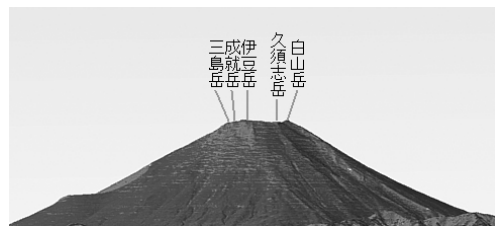


図 25 登戸神社から 画角 3°

の小さく描かれた富士山頂部の形は現実の形状と比べてどの程度の写実性を保持しているのでしょうか。描かれた位置関係と照合しながら比較をおこなう。

図 17 に見るように登戸浦は東京湾を挟んで現在の千葉市登戸神社の位置にある。当時は神社のある高台の真下まで海岸があり、海に向かって鳥居があった。現在の鳥居は東側に設置してある。遠くに見える山頂部を拡大してみると、その形は日本橋からの形状とほぼ一緒である。作品内ではどちらも右側をやや鋭角に示している。両端にある突起は右側部分が白山岳（釈迦岳）、左側部分が剣ヶ峰と伊豆ヶ岳の重なりである。図 20、24。またそれぞれの位置の 10000m 以上上空から、火口部の配置を見て比較すると、描かれた側面からみた火口部の形状がどの岳に相当するのか判断することができる。図 26、27。これらの比較から北斎は江戸方面から富士を描く場合、剣ヶ峰と白山岳を特徴として描こうとし、微妙な形の表情の差も画面の中で小さい領域で表現しようとしている事がわかる。

以上のように見てみると、北斎は富士山の火口を想像で描いた訳でなく、現実風景の写生を元に縮小または変形がなされている。一方で特徴の弱い岳は適度に省略している点も明らかである。この点はここでは具体的な例としてはあげていないが広重の描く富士の写実性と



図 26 登戸神社上空 15000m から 画角 1°

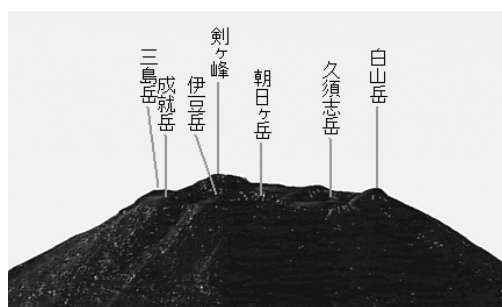


図 27 日本橋上空 12000m から 画角 1°

は目的が異なっている。このような変形（デフォルメ）の利用は印象派とされる画家が特に好んだ技法であり、特にセザンヌは、絵画構成上、画面の絵画性を高めるために、モチーフの変形を行っている。印象派を含め、浮世絵に含まれるデフォルメの要素が印象派に影響を与えている点は特にゴッホ等の作品では自作品への利用から判断して明白ではあるが、他の作家たちが受けた影響について数多く言及されているが今のところ参照や推測の域を出てはいない。

また、北斎を始め、江戸末期の浮世絵の描写様式を見てみると、南瀨画の手法が取り入れられ、岩や枝、波など形の特徴を過剰に表現する傾向がある。しかしそれらは常に写生画が元になっている点が重要である。その点も想定して写実性を判断すべきであろう。

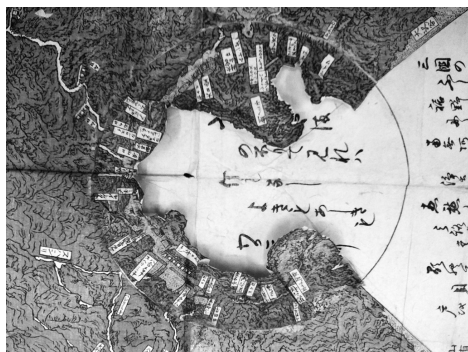


図 28 貞秀 富士真景図火口部 岐阜県地図分布センター



図 29 貞秀 富士真景図火口部立体細工 岐阜県地図分布センター

図 28、29 は江戸末期作られた富士山立体地図の部分である。版の無い箇所を切って貼り合わせ円錐状にする立体地図で、特に火口部のところは細かく作り込んである。図 29 火口部右端の釈迦割ヶ岳（白山岳）の形状が示すように火口部に立ったときの起伏のスケールを表しており、形状も富士山全体のスケールに対し大げさに描かれている。このような形の強調方法は江戸後期以降の山頂部の描写様式として一般的な手法である。

3.2 「山下白雨」の位置特定

富嶽三十六景の代表的な作品に「山下白雨」と「剽風快晴」がある。どちらも富士の特徴を前面に出しながら北斎の形を強調する様式が存分に堪能できる作品である。狩野博幸氏は「剽風快晴」を中心に様々な視点から富士山絵画の背景について広く言及されている

「山下白雨」はその芸術性について多く語られるが、描かれていた場所について解析する文献は少なく、場所の特定が不可能とする点が上げられている。しかしながら、北斎が写生を元とする画家であれば、画法から形態を判定することは可能である。これまでの北斎の描き方の特徴から以下の点について配慮して、場所の特定を試みる。

- 1、構図の構成上その風景の特徴を大きく描いて配置する。
- 2、同様に形の特徴を過剰に描くことがある。
- 3、風景全体において山や事柄の前後関係や配列などの関係性は現状を反映させる。
- 4、上記の状況のなかで余分な空間や特徴の無い山並みなどを省く。
- 5、全景と背景をつくり、それぞれに異なる視点を持たせる場合がある。

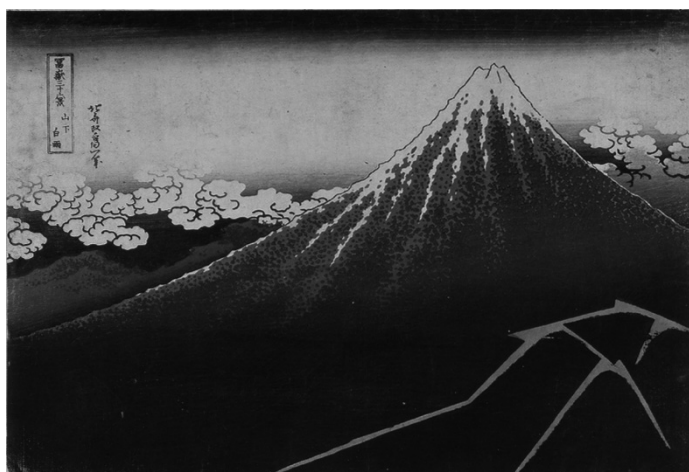


図 30 葛飾北斎 富嶽三十六景__山下白雨 東京国立博物館所蔵



図 31 葛飾北斎 富嶽三十六景__山下白雨の富士山頂部分 東京国立博物館所蔵

以上の点から、(a)山頂部、(b)山の傾斜、(c)右下の雷といわれる形、(d)左の背景の山についてそれぞれ注意を払いながら場所を検証する。

(a) 山頂部

山頂部の形状からは突出した剣が峰と白山岳が候補にあげられる。突起した左側の大きな切り込み線を崩れたものとすれば、剣が峯の脇の大澤崩れであるし、「三坂水面の富士」を参照すれば白山岳となる、また現在の白山岳とつながる割石の関係から白山岳と割石ではないか。

(b) 山の傾斜

太宰治が富嶽百景の冒頭で「富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四

度くらい、けれども、陸軍の実測図によって東西及び南北に断面図を作ってみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。」…「北斎に至っては、その頂角、ほとんど三十度くらい」…。と示すように北斎の描く富士は通常より角度がきつく火口部の形も小さくすることで山の高さを強調している。反りが強く、見た場所からの特徴によって、山肌の違いや印象を描き分けている。

(c) 右下の雷といわれる形

この形状表現には雷とする説と手前の山とする説がある。

雷であるという根拠は富嶽百景の夕立における雷の描写表現形態との近似性である。

山である場合はこの絵が日の出直後か日没直前であると想定すると、手前の山肌が反射光のみで赤暗く見える可能性もある。この絵の場合、裾野が暗くなっている状況で頂上部と左側が明るくなっている点から、日の出直後であれば山の北側、日没直前であれば山の南側であることが想定できる。

(d) 左の背景の山

二つの頂上を持ち、富士の背後と画面左へも山並みが繋がっている。描かれた富士山との関係からみれば 2000m 以上の山であるが、現実には該当するものがなく、1000m から 2000m 程度の山で検討する必要がある。またその頂上よりやや高い視点から描かれていると判断できる。

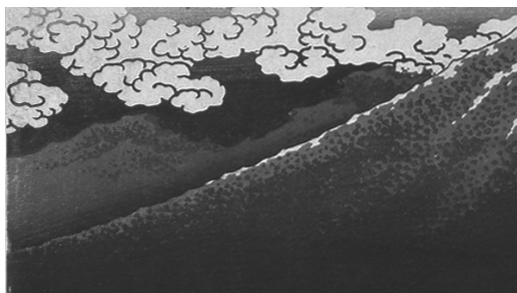


図 32 葛飾北斎 富嶽三十六景__山下白雨 部分、位牌岳 越前岳と思われる箇所 東京国立博物館所蔵

以上の点から背景の山に関して愛鷹山を構成する位牌岳（1458m）と越前岳（1504m）が候補としてあげられる。これらの山を前提として、該当する山の山頂や峠から見た風景を数値データから仮想表示する。位置関係の検討にあたっては図 17 の鳥瞰図を参考にしてほしい。「山下白雨」の山頂部の突起が白山岳（釈迦ヶ岳）とした場合、これらが見える位置や位牌岳と越前岳が見える山や峠には富士東陵方面に杓子山（1598m）エリア、三つ峠山（1786m）エリア、大菩薩南嶺方面に雁ヶ腹摺山（1874m）大菩薩嶺（2056m）エリアがあげられる。

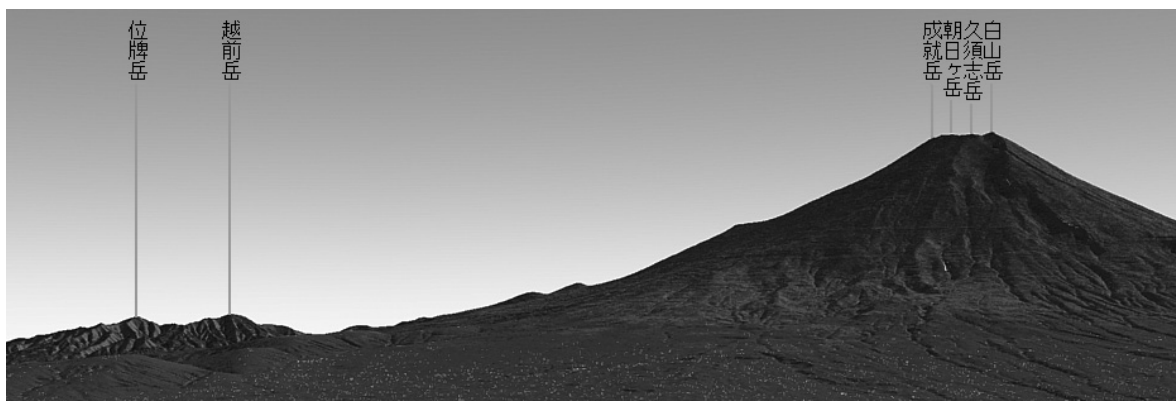


図 33 杓子山から

杓子山からは、斜面の宝永山や小噴火による山や塚が見られる。この部分と絵の背景の形を並べてみると位牌岳と越前岳の形の特徴はしっかりと見ることができる。しかしながら越前岳が見え過ぎている。また、頂上の白山岳の位置がだいぶ異なっている。

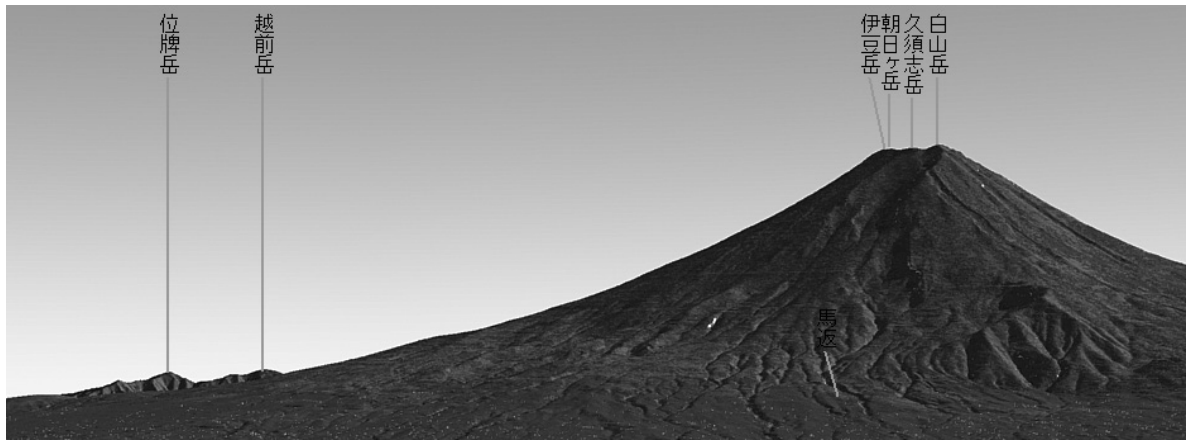


図 34 ミツ峠山山頂から

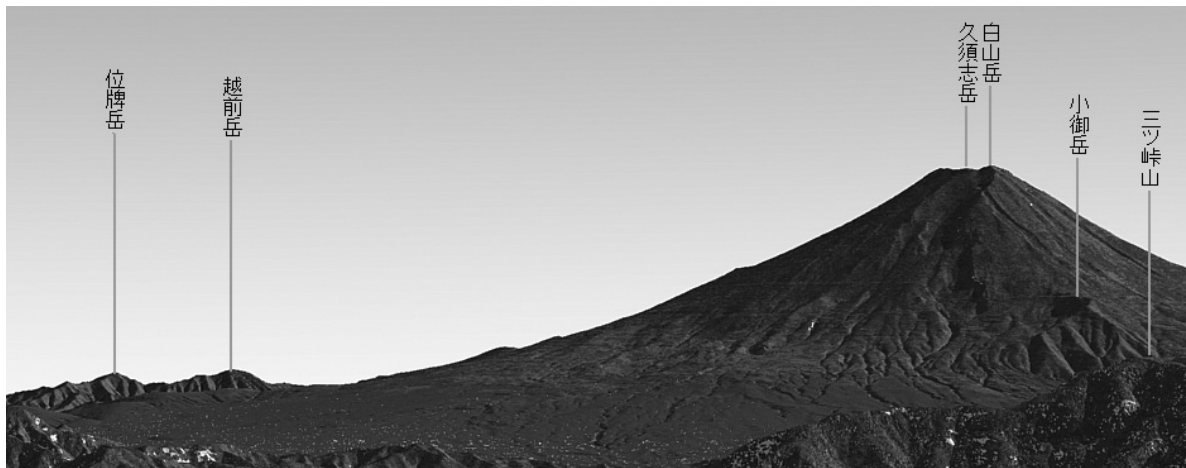


図 35 雁ヶ腹摺山山頂から



図 36 大菩薩嶺から

ミツ峠山頂上から図 34 は背景の山の形が絵とほぼ同等である。越前岳の山の傾きと富士の傾きが平行で適切な近似を持っていることが見て取れる。また、宝永山も隠れてよりきれいな斜面が現れる。雁が腹摺山頂位置からの画像図 35 では手前にミツ峠山も右下眼下に入

り、ほぼ同形で位牌岳越前岳が見ることができ山腹に宝永山と塚が多少見えている。雁が腹摺山のエリアは西へ移動すると大峠、黒岳へ尾根沿いに向かってもほぼ同様の形態を見ることができる。この位置は旧五百円札に印刷された富士山の撮影地として、有名である。江戸期もこの地から見る富士の景観の美しさが認知されていたのかは定かではない。またこれより北に大菩薩嶺がある。大菩薩峠からは手前の山並みが遮られて見ることはできないが峠から尾根に沿って大菩薩嶺に向かう途中に雷岩があり、ここからは位牌岳越前岳を見ることができる。(図 36)

これまでの比較によって、北斎の写実性から判断すれば位牌岳と越前岳の大きさを画面構成のため変更し配置した場合「山下白雨」の構図は大菩薩嶺南、雁が腹摺山か三ツ峠山からの風景で再現できるとして良さそうである。しかしながら山頂の形状に付いては白山岳とその右側（西側）の割石と判断するには現実の風景ではまだ小さすぎるのではないか。では山頂部の比較を行い、より適切な位置を検討する。



図 37 三ツ峠山から

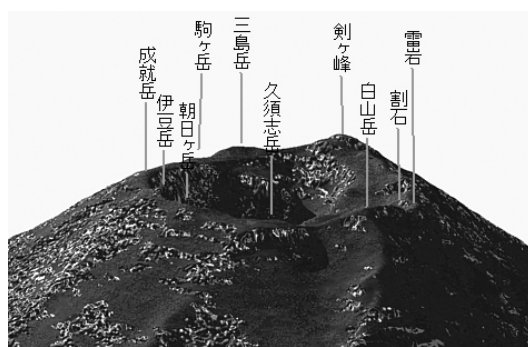


図 38 三ツ峠上空 12km



図 39 雁が腹摺山から

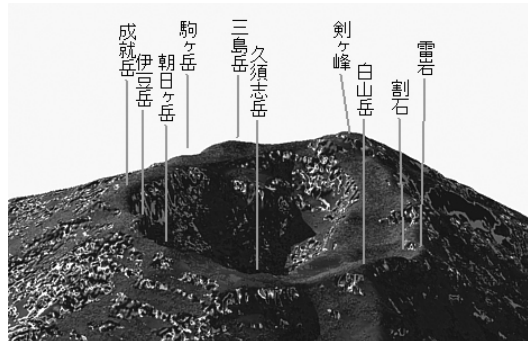


図 40 雁が腹摺山上空 12km



図 41 大菩薩嶺雷岩から

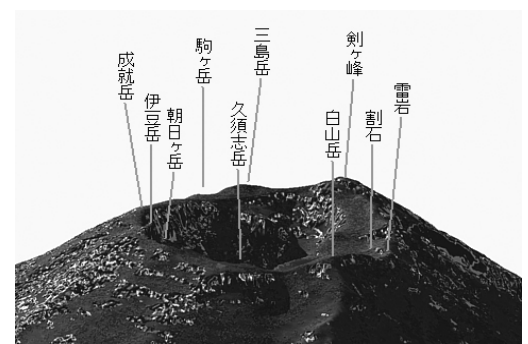


図 42 大菩薩嶺雷岩上空 15km

山頂部の形を並べて比較した場合、白山岳の位置や割石から雷岩へつながる形から考えて、

図 41、42 大菩薩嶺の雷岩から見た形が一番「山下白雨」の山頂の形に近い。割石や奥に雷岩も確認でき形状の照合が可能である。以上の結果から、作品中の手前の雷状の描写が山である場合は適切な位置は周辺で抽出しなければならないが、富士山に対する位牌岳、越前岳との関係や山頂部の形など総合的に考えると大菩薩嶺の雷岩のあたりからの風景が「山下白雨」の視線位置の第一候補となるだろう。

4. まとめ

北斎が写生を前提とした制作をおこなっているという仮定に立って、描かれた場所の特定を行ったが、近世絵画においては写生という前提条件によって写実性が維持され、一方で絵画構成のために対象物のサイズが変更されたり、不要なものが排除されていたりという自由度が含まれている。このようなあり方に対し、今後定型や様式の問題、そしてこれらへ向かう上での写生画の位置づけやそこから引き出される写実性の性質の違いなど、近世絵画史の大きな流れの中で長い時間をかけて価値観の変異があることを見ていく必要があるだろう。もちろん、個別の作家の様式や写生画と本画の関係などについても丁寧に調べていく必要もあるだろう。近世絵画は写意的でありながらも写実的要素を維持しているが、近代に入って様式的な絵画の新しい形を追求するようになって行く。皮肉にもこれらの要因となったのは北斎を始めとする浮世絵などの作品群である。このような芸術への世界的貢献度に目が向きがちではあるが、写生を元とする写実性を維持する価値観が北斎のような画狂人を生み出したことも事実として認識する必要があるだろう。

本論文では北斎の富嶽三十六景すべてにおいて、言及することはできなかったが、他に場所が明らかになっていない作品や他の作家との比較によって、近世絵画にふくまれる写実性の位置付けを明らかにし、日本の近世絵画に対し、これまでと異なる視点から、芸術解析の基準を提示できれば幸いである。

* 注 本論中、国土地理院数値データによる富士山のレンダリング画像はすべてカシミール 3Dver8.8.2 で制作した。

参考文献

1. 齊藤月琴、朝倉亀三、増訂武江年表、国書刊行会、1912
2. 小島烏水、富士山大観、如山堂、1904
3. 小島烏水、江戸末期の浮世絵、小島烏水全集第十四巻、大修館書店、1986
4. 山下善也、探幽縮図―とくに風景スケッチにかんして―、鹿島美術研究 13、1997
5. 山下善也、狩野探幽筆、富士山圖、國華一二〇二号、国華社、1996
6. 成瀬不二雄、富士山絵画の始まり、山岳信仰と考古学、同成社、2003
7. 成瀬不二雄、富士山の絵画史、中央公論美術出版、2005
8. 成瀬不二雄、日本絵画の風景表現、中央公論美術出版、1998
9. 成瀬不二雄、江戸時代の洋風画の富士図について、日本洋画史の研究、創元社、1982
10. 狩野博幸、剽風快晴―赤富士のフォークロア、平凡社、1994
11. 磯博、河村岷雪の「百富士」と北斎の富嶽図 美学論究、関西大学、1961
12. 福本和夫、北斎雑孝、國華五七号、國華社、1947
13. 安村敏信、狩野探幽再考、狩野探幽展、板橋区立美術館、1983